●発行／豊岡市 ●編集／政策調整部秘書広報課
☎0796-23-1111 FAX24-1004
市長室 FAX24-1004
〒668-8666
兵庫県豊岡市中央町2番4号
URL http://www.city.toyooka.lg.jp
（支所）
・竹野☎47-1111 ・日高☎42-1111 ・城崎☎32-0001
・出石☎52-3111 ・但東☎54-1000

豊岡偉人伝 16

私たちの暮らしの発展に尽くし、近代日本の礎を築いた人、スポーツ・芸術の普及発展に心血を注いだ人など、豊岡にはさまざまな先人たちの心が息づいています。
その先人たちに学び、志を引き継ぎましょう。

《問合せ》文化振興課☎23-1160

辰鼓楼に大時計を寄贈　池口忠恕

池口忠恕

（1851～1908）
出石町出身

生い立ち

池口忠恕は江戸時代も終わりに近づく嘉永４（1851）年に、出石藩の医師の息子として生まれました。藩校「弘道館」で漢学や武道を修業し、明治４（1871）年２月から11月まで大阪の緒方洪庵の適塾で、さらに明治８年からは東京の佐藤順天病院で西洋医学を修業しました。

出石で医院を開業

池口が、出石町八木に医院を開業したのは、明治13（1880）年、29歳のときのことでした。当時の出石の農村には薬代が払えない、貧しい患者がたくさんいました。しかし、彼は、診察代がもらえないことを承知でそういった患者も診ていました。

池口は、ある往診に出向いたとき、患者の家族に、「薬を取りに来るとき、荷車を持って来い」と伝えました。「何のことか分からぬが先生がおっしゃるなら」と、家族が荷車を引いて薬をもらいに行くと、「薬はいらぬ、米を一俵やれ」と、蔵から米一俵を与えたといいます。

感謝の印の大時計

池口が辰鼓楼に大時計を寄贈したのは明治14（1881）年のことです。辰鼓楼は、明治４（1871）年に、廃城となった出石城の大手門の石垣を利用して建築され、城下の人々に太鼓で時刻を知らせていました。

寄贈のきっかけは、自身の病気の全快祝いでした。大病を患い、多くの見舞いを受けた池口は、そのお礼にと辰鼓楼に大時計を寄贈したのです。

青年２人の派遣

寄贈に当たって、彼は、東京に地元の青年２人を派遣して時計造りの技術を学ばせ、大時計を製作させました。そのときの青年２人は、後に出石で時計商として開業しながらこの大時計を管理しました（青年２人の派遣先は長崎で、オランダ人に付いて修業した、との記録もあります）。時計の寄贈は、池口自身が東京で学んだ経験から発案したものと想像されますが、出石城下町の人々にとってこの大時計の姿は、まさに新しい時代の到来を感じさせたことでしょう。

池口の書「学びて厭わず」（論語の一説）

多くの会葬者

明治41（1908）年、池口は脳溢血で58歳で死亡しました。

その葬儀の様子は、「死を惜しむ会葬者は沿道数町を埋めつくし、その多さは出石町はじまって以来のことで、俗に申す空前にして絶後のであると思います」と記録されています。

願成寺（出石町東條）にある池口忠恕の墓

「扶氏医戒」の教え

池口の適塾での師である緒方洪庵は、塾生に、ドイツ人医師フーフェラントの医学書を訳し、「扶氏（フーフェラント）医戒」という名でこれを教えました。この冒頭に「医学は自分の身を立てるためではなく、人の命を守り、人の病苦から患者を救うためのものであって、それ以外の目的を考えてはならない。患者を診る際はただ患者を診ればよい。患者の貧富を見る必要はない」という文章があります。

まさに彼はこの「扶氏医戒」の教えのままに生きた人物といえます。